

文化 第八十一卷 第三・四号 | 秋・冬 | 別刷  
平成三十年三月二十六日発行

蘇軾「寒食雨二首」詩について

—「死灰吹不起」句を中心に—

室  
貴  
明

## 蘇軾「寒食雨二首」詩について

### 「死灰吹不起」句を中心に

室 貴 明

#### 一 はじめに

蘇軾（一〇三六—一一〇一）は、「烏台詩案」と呼ばれる筆禍事件によって、黄州へと左遷された。元豊三年（一〇八〇）のことである。黄州左遷期は蘇軾にとって、官僚として低い地位に甘んじたものの、前後「赤壁賦」や「念奴嬌 赤壁懷古」を創作するなど、文学の方面では実りの多い時期であった。黄州左遷期の蘇軾について、山本和義氏は以下のように述べる。

長江北岸の黄州は辺鄙な田舎であったが、蘇軾はそのゆたかな山水に安堵して、「長江は郭を纏って魚の美きを知り、好竹は山に連なりて筍の香しきを覚ゆ」（「初到黄州」、合註卷二十）とたたって食いしん坊の一端をのぞかせる。「人生は寄するが如し、何ぞ樂しまざる」（「答呂梁屯田」、合註卷十五）とうたう蘇軾のこと、その境涯はまさ

しく悲惨ではあるが、それがもたらす悲哀に沈淪することはしない<sup>1)</sup>。

無論、蘇軾が己の境遇に無自覚であったわけではない。山本氏は、続けて言う。

蘇軾は定惠院に寓居する。そのひとは幽人である。幽人は、吉川幸次郎先生が「私の杜甫研究」で説かれたように山中幽棲の人の義に、罪ある人の義を併せ持っている。（中略）蘇軾は幽人の両義を強靱に生きようとする<sup>2)</sup>。

他の先行研究も、黄州左遷期の蘇軾は深刻な挫折を味わいながらも、再生を願ったことを詩で表現したとしている<sup>3)</sup>。蘇軾自身が再生を願ったことは、彼の手になる「黄州安国寺記」（『蘇軾文集』巻十二）<sup>4)</sup>に「自ら新たにするの所以の方を求む（求所以自新之方）。」

と記されていることからわかる。しかし、左遷の地で「悲哀に沈淪すること」なく、「幽人の両義を強韌に生きよう」とした黄州左遷期の蘇軾にも、自身の境遇を悲観した詩がある。

その一つが、「寒食雨二首」である。蘇軾が黄州に左遷されてから三年目の元豊五年（一〇八二）に書かれた。蘇軾の真跡も残っており、広く知られた詩である。梗概を記せば、左遷の地で時は過ぎゆき、長雨に苦しみ（「寒食雨二首・其一」）、己の貧相な暮らしぶりを描写し、政治にも参加できず、故郷にも帰れないと嘆き、末句を「死灰吹不起（死灰吹くも起たず）」と結ぶ（「寒食雨二首・其二」）。末句の「灰」について、歴代の注釈者たちは、それぞれに異なる典拠を引用して解釈を試みている。末句には、以下の注が付されている。

王注、前漢書韓安国法に坐し罪に抵たり、獄吏田甲安国を辱しむ。安国曰く、死灰独り復た然えざらんや、と。曰く、然らば則ちこれを溺す、と。施注、晋律曆志、時日を晷度に計り、地気を灰管に効す、故に陰陽和せば則ち景至り、律氣応ずれば則ち灰飛ぶ。灰飛の通、吹きてこれを命づけば、則ち天地の中声なり。榴案ず、宋玉風賦、死灰を吹く。（王注、前漢書韓安国坐法抵

罪、獄吏田甲辱安国。安国曰、死灰独不復然乎。曰、然則溺之。施注、晋律曆志、計時日於晷度、効地氣於灰管、故陰陽和則景至、律氣応則灰飛。灰飛之通、吹而命之、則天地之中声也。榴案、宋玉風賦、吹死灰。）

歴代の注釈者たちは、それぞれ『漢書』『韓安国伝』『晋書』『律曆志上』・宋玉『風賦』を引用して解釈を試みている。以上の注釈を承け、近藤光男氏<sup>7</sup>と山本和義氏は、主に王十朋（一一一二～一一七一）の注（以下、王注）が引く、『漢書』『韓安国伝』によって、「死灰吹不起」句は、詩人が為す術もなく再起の気力もない状態にあることを詠んだと解釈している。王水照氏<sup>7</sup>・陳邇冬氏<sup>8</sup>も『漢書』『韓安国伝』によって解釈するが、そこには、詩人が再び害を受けることを避けようする意が込められているとする。筆者も王注に拠った解釈に一定の妥当性があると考え。しかし、該句の注釈が複数ある以上、詩人が再起不能の状態であることの他にも、意味が重ねられている可能性はないだろうか。その可能性を探る際に着目したのは、施元之（一一〇二～一一七四）の注（以下、施注）である。施元之の注釈は、陸游（一一二五～一二一〇）が序文<sup>9</sup>で「則ち東坡の意に於いて、蓋し幾ど以て憾無かるべし。（則ち東坡之意、蓋幾可以無

憾矣」と述べるほどの注釈であるにもかかわらず、管見の限り、施注を承けて該句を解釈しているものは見当たらない。そこで小稿では、施注を手掛りに末句を解釈すると、寒食雨二首がどのように読めるのかを考察する。あわせて末句のキーワードである「灰」が、蘇詩において如何に使用されてきたのかを分析し、「死灰吹不起」句が蘇軾の生涯にどのような位置づけができるかを見ていきたい。

## 二 「寒食雨二首」と「死灰吹不起」句の注釈

本章では、「寒食雨二首」と「死灰吹不起」句に付された注釈を見ていく。まずは、「寒食雨二首」を挙げ

る。

「寒食雨二首・其一」<sup>10</sup>  
自我来黄州 我黄州に来てより

已過三寒食 已に過ぐ三たびの寒食を  
年年欲惜春 年年春を惜しまんと欲すれど  
春去不容惜 春去って惜しむを容れず

今年又苦雨 今年又た雨に苦しみ  
兩月秋蕭瑟 兩月秋蕭瑟たり

臥聞海棠花 臥して聞く海棠の花の  
泥污燕脂雪 泥に燕脂の雪の汚さるるを

暗中偷負去 暗中偷かに負いて去る  
夜半真有力 夜半真に力有り

何殊病少年 何ぞ殊ならんや病める少年の  
病起頭已白 病より起てば頭已に白きに

黄州に来てから三度目の寒食。春を惜しむも、春は容赦なく去って行く。今年もまた長雨に苦しめられ、この二ヶ月は秋の寂しさ。臥して聞けば雨の中、海棠の花が泥に汚されているのだろう。夜半に力持ちが、春を密かに背負っていく。毎年春を見送り老いていくのは、少年が病から起き上がったとき、白髪頭になってしまうのと何が異なるのか。

三・四句目では、「春」の字を二度も使い、詩人の思いとは関係なく「春」が過ぎ去っていくことを強調する。ところが、次の聯では一転して、季節が秋であるかのような描写に移る。

五句目の「苦雨」は、長雨に苦しむ意であり、秋を想起させる言葉でもあると考えられる。例えば杜甫（七一二～七七〇）の「賈嚴の二閣老兩院の補闕に留別す（留別賈嚴二閣老兩院補闕）」詩<sup>11</sup>で「一秋常に雨に苦しむ、今日始めて雲無し（一秋常苦雨、今日始無雲）」と秋に長雨に苦しんだことを詠い、宋代でも梅堯臣（一〇〇二～一〇六〇）の「苦雨」詩<sup>12</sup>で「秋空幾旬の雨、四海鵬翮を低る（秋空幾旬雨、四海低鵬

翻)。」と秋の長雨の様子を詠う。秋を想起させる「苦雨」と、次の句にある「秋蕭瑟」とが響き合い、寒食の時期であるにもかかわらず、秋のような気候であることが強調される。

「海棠花」は、元豊三年に書かれた「寓居定惠院の東、雜花山に満つ、海棠一株有り、土人貴きを知らざるなり(寓居定惠院之東、雜花満山、有海棠一株、土人不知貴也)」「合注」巻二〇)詩でも詠われる。該詩から海棠は、「陋邦何の処より此の花を得たる、乃ち好事の西蜀より移せる無からんか(陋邦何処得此花、無乃好事移西蜀)。」と、「西蜀」すなわち蘇軾の故郷の花であることがわかる。異郷の地で見た海棠の由来に思いを馳せた後に、「天涯流落俱に念うべし(天涯流落俱可念)」と、詩人と海棠が異郷に落ちぶれた思いを共にしているだろうと詠う。かくの如く、異郷で出会った故郷の花に対する詩人の思い入れの強さが印象づけられる。「寒食雨二首」で詩人は異郷で「泥」に汚される「燕脂雪」の花びらを持つ海棠を、異郷の地で季節外れの天候に苦しむ詩人自身の姿とも重ねているのではないだろうか。同時に横になって海棠の花を思うとは、秋の長雨のような天候に苦しむ詩人が、記憶の中の春を懸命に見つけようとする姿でもあろう。続いて、「其二」を挙げる。(以下、傍線部は筆者)。

「寒食雨二首・其二」

春江欲入戸	春江戸に入らんと欲し
雨勢来不已	雨勢来りて已まず
小屋如漁舟	小屋 漁舟の如し
濛濛水雲裏	濛濛たり水雲の裏
空庖煮寒菜	空庖 寒菜を煮
破竈燒湿葦	破竈 湿葦を焼く
那知是寒食	那ぞ知らん是れ寒食なるを
但見烏銜紙 <sup>13</sup>	但だ見る烏の紙を銜むを
君門深九重	君門 深きこと九重
墳墓在万里	墳墓 万里に在り
也擬哭途窮	也た途の窮するに哭せんと擬し
死灰吹不起	死灰吹くも起たず

増水した春の江は戸口にまで迫り、雨の勢いは止まない。小屋は漁舟のようで、もうもうとした水と雲の中にある。がらんとした厨房で野菜を煮、壊れた釜で湿気った葦を燃やす。どうして今が寒食と知れよう、ただ鳥が喙に紙錢を銜むのを見るだけだ。天子は宮廷深くにおり、一族の墓も遙か万里にある。阮籍のように行き止まりにあったら哭いてみようか、冷たい灰は吹いても起こらない。

詩人のいる「小屋」は「漁舟」のごとく、「濛濛」とした「水雲」の中にある。一・二聯目は、詩人が雨にふ

り込められ、不安定な場所にいることを感じさせる。

「小屋」の中では、「湿葦」で「寒菜」を「煮」ている。しかし、その光景は寒食のものではない。寒食は冬至から数えて百五日目に、火をおこさない時期だからである<sup>14</sup>。韋応物（七三六～七九一？）も「寒食京師の諸弟に寄す（寒食寄京師諸弟）」詩<sup>15</sup>の中で「雨中禁火空齋冷く、江上流鶯独り坐して聴く（雨中禁火空齋冷、江上流鶯独り坐して聴く）」と寒食の禁火を守り、部屋が冷えていることをいっている。では、禁火を犯している「寒食雨二首」の該聯を、どのように解釈すればよいのだろうか。

『合注』には該聯の付注はない。一方で、日本で刊行された蘇軾詩の注釈書『四河入海』では、該聯に二家の注が付されている。一つは、瑞溪周鳳（一三九二～一四七三）で「脞云えらく、此の以下二句蓋し凡そ寒食煙火を禁ずるを言う。然るに坡今湿葦を焼き寒菜を煮るは則ち佳節を知らざる、知るべきなり（脞云、此以下二句蓋言凡寒食禁煙火。然坡今焼湿葦煮寒菜則不知佳節、可知也）。」<sup>17</sup>と、寒食は禁火を行うものであるが、蘇軾が煮炊きをしている以上、蘇軾は佳節であることを知らず、そのことをわかるべきであると説明する。しかし、詩題に「寒食」とあり、「其一」でも、一句目で三度目の寒食であると意識している以

上、佳節であることを知らないとは言い難いのではないだろうか。

もう一つは、一韓智翹（一五世紀）の「言凡寒食ニハ煙火ヲ禁スルカ坡ハ今寒菜ヲ煮占メ葦ヲ焼クソ、是ハ外国ニ在テ佳節ヲモ知ラザルホトニソ、謫居ノ心知ル可キノ」<sup>18</sup>であり、禁火を犯すのは、習慣の異なる土地では、佳節を知らないからであると説明する。寒食の習慣がないことに言及するものに、沈佺期（六五〇？～七一三？）の「嶺表逢寒食（嶺表寒食）」詩<sup>19</sup>がある。沈佺期詩は驩州（今のベトナム）で書かれ<sup>20</sup>、「海外寒食無く、春來たるも餒を見ず（海外無寒食、春來不見餒）」と、異郷では寒食の風習がなく、ゆえに春になっても「餒」（寒食に食べる飴）にありつけないことを詠う。後述するが、蘇軾にも海南左遷後に寒食の風習がないことを詠う詩がある。しかし、「寒食雨二首」は、前掲の沈佺期詩のように、寒食の習慣がないことを詠ったものではない。あるいは、黃州での謫居生活が、寒食の風習がない土地にいると錯覚させると読むことはできるかもしれない。しかし、錯覚をしているとしても、「其一」を見るとやはり、寒食を意識しているのではないだろうか。ここで考えたいのは、「其一」の「今年又苦雨、兩月秋蕭瑟」聯である。前述したとおり、秋を想起させる言葉

があり、季節が合っていないことを意識させる聯である。該聯は「其一」の三聯目にあたり、この禁火を犯す聯も、「其二」の、三聯目に配置され、「其一」と対になっている。禁火を犯したのが、実景か心象風景のいずれであっても、「其一」の三聯目と同じく、季節が合っていないことを表現する聯と読むことも可能であろう。

その中で、詩人が見たのは「紙」を「銜」んだ「鳥」であった。「但見鳥銜紙」句に施注は、白居易の「寒食野望吟」詩の「風曠野に吹き紙錢飛ぶ（風曠野紙錢飛）」句を引く。これは寒食の時期に見られる光景を詠っている句である。詩人は季節のずれを感じながらも、紙錢を銜えた鳥を見て、寒食を見つけ出そうとする。次の聯で、詩人の心は、黄州から遠く離れた地へと移る。しかし、左遷された身、都の天子を思っても「深きこと九重」、故郷の墓を思っても「万里に在」る。遂に窮した先人のように「哭」こうとしたが、「死灰」は「吹」いても「起」つことはない。結ぶ。先述した通り、結句に施注は、『晋書』卷十六「律曆志上」を引く。「灰管」の灰が氣候に応じて飛ぶことであり、「死灰吹不起」の「灰吹」とは正常に季節がめぐることを指す。これまで見てきたとおり、「寒食雨二首」には、秋のような寒食、つまり季節が

巡らない寒食の様子が詠まれていると述べた。そのような状況をふまえた上で施注を重ねあわせてみれば、「冷たい灰は（季節が巡らないので）吹き上がらない」という解釈となるであろう。詩人は目の前の吹き上がらない灰から、再起の気力もない事だけでなく、季節が巡らない環境に置かれた不安感をも詠いこんでいると考えられる。

それでは、「灰」は蘇軾の他の詩において、どのように現れているだろうか。以下、具体的に詩をとり上げながら、比較検討を試みたい。

### 三 蘇詩における詩語としての「灰」

『合注』記載の編年詩によれば、蘇詩の中で「灰」が使われているのは「寒食雨二首・其二」を除いて、三十八例見られる。

小稿では、蘇軾の生涯を便宜的に三期に分けて考察する。黄州左遷以前（一〇五九～一〇七九）、黄州左遷期（一〇八〇～一〇八四）、黄州左遷以後（一〇八五～一〇一一）である。

#### 三・一 黄州左遷以前（一〇五九～一〇七九）

黄州左遷以前の「灰」の用例は、計十七例<sup>22</sup>ある。



ここでは、そのうち二例を取り上げる。もっとも早い用例として、『莊子』を典拠とする「王維呉道子の画」詩を挙げる。

「王維呉道子画」(『合注』卷四、嘉祐六年

(一〇六一) 作、二十六歳、於鳳翔)

何処訪呉画 何れの処にか呉画を訪ねん

普門与開元 普門と開元と

開元有東塔 開元に東塔有り

摩詰留手痕 摩詰手痕を留む

吾観画品中 吾れ画品の中を観るに

莫如二子尊 二子の尊きに如くは莫し

道子実雄放 道子実に雄放

浩如海波翻 浩として海波の翻るが如し

当其下手風雨快 其の手を下すに当りて風雨快なり

り

筆所未到氣已吞 筆の未だ到らざる所氣已に吞

む

亭亭双林間 亭亭たり双林の間

彩暈扶桑暈 彩は暈す扶桑の暈

中有至人談寂滅 中に至人の寂滅を談ずる有り

悟者悲涕迷者手自捫 悟る者は悲涕し迷う者は手

自ら捫なづ

蛮君鬼伯千万万 蛮君鬼伯千万万

相排競進頭如鼉 相排して競い進んで頭鼉の如し

摩詰本詩老 摩詰本と詩老

佩芷襲芳蓀 芷を佩び芳蓀を襲ぬ

今觀此壁画 今此の壁画を觀るに

亦若其詩清且敦 亦た其の詩の清くして且つ敦な

るが若し

祇園弟子尽鶴骨 祇園の弟子尽く鶴骨

心如死灰不復温 心は死灰の復た温かならざるが

如し

門前兩叢竹 門前の兩叢竹

雪節貫霜根 雪節霜根を貫く

交柯乱葉動無數 交柯乱葉動くこと無數

一一皆可尋其源 一一皆な其の源を尋ぬべし

吳生雖妙絕 吳生妙絶なりと雖も

猶以画工論 猶お画工を以て論ず

摩詰得之於象外 摩詰これを象外に得て

有如仙翮謝籠樊 仙翮の籠樊を謝するが如き有り

吾観二子皆神俊 吾れ二子を觀るに皆な神俊

又於維也歛衽無間言 又た維に於て也た衽を歛め

て間言無し

「王維呉道子の画」詩は、「鳳翔八観」全八首の三首目にあたる。「鳳翔八観」の序文<sup>23</sup>に、鳳翔には八つの見るべきものがあり、好事家といえども全てを



見ることができないので、そのような人たちのために自分が詩にした、とある。該詩の冒頭から第六句までは、王維（六九九〜七五九／七〇一〜七六一）と呉道子（八世紀）の画のある場所を紹介し、この二人の画こそが、誰の画よりも「尊」いことを述べている。第七句から第十六句までは呉道子の画について述べる。

「雄放」な筆使いで釈迦の涅槃の様子を描かれている。そこには、「悲涕」する者や「手」で「自」らを「捫<sup>な</sup>」でる者があり、「蛮君鬼伯」が「競」って「頭」を「進」ませるさまが描かれている。第十七句から第二十六句までは、王維の画を描写している。「清」らかで「敦」いその画には、「鶴骨」を備えた「弟子」たちがおり、その「心」は「死灰」のようである。続く第二十七句から結句までは、王維と呉道子に対する評価である。呉道子の画は「妙絶」ではあるが、「画工」に留まっているのに対して、王維の画は「象外」を「得」ており、兩人ともに「神俊」であるとしながらも、王維については言うことがないと一段上の評価をしている。

該詩では、王維と呉道子の画を対比させて詠んでおり、王維の画を描写する第二十二句に「死灰」が見える。釈迦の涅槃に際して、呉道子の画では動揺する者たちが描かれている。これに対して王維の画では、修

行者の骨相である「鶴骨」を備えた「弟子」たちが描かれており、詩人は彼らの「心」が「死灰」の復た温かならざるが如し」と感じとる。「死灰」の句には、「王注、莊子齊物論篇、形固より槁木の如くならしむべく、心固より死灰の如くならしむべきか（王注、莊子齊物論篇、形固可使如槁木、心固可使如死灰乎。）」との注がある。これは、『莊子』齊物論篇に見える南郭子綦と顔成子游の對話の一部である。顔成子游が「体を本当に枯れ木のようにすることができのですか、心を本当に冷たい灰のようにすることができのですか。今の姿は、以前と別人のようでした」と尋ねる。南郭子綦は「良い質問だ。今私は自分自身を喪っていた。お前にわかったかね。お前に人の籟の音が聞こえても、地の籟の音は聞こえまい。地の籟の音が聞こえても、天の籟の音は聞こえまい」と答えた<sup>24</sup>。以上の對話から、心が「死灰」のようであるとは、南郭子綦のいう「自分自身を喪っていた」状態のことであろう。

この注に従えば、先に見た『莊子』齊物論篇の南郭子綦の言葉「吾我を喪う」の状態に通じ、ここでの「死灰」とは、釈迦の死にあっても、「弟子」たちが「自分自身を喪った」ような、感情に動かされることのない状態にあることを指すとの解釈が可能であろう<sup>25</sup>。このよ

うな「死灰」の「心」を持つ「弟子」という存在には、これを描いた王維もまた優れた人物であることを示す効果をも、詩中にもたらしめている。

次に挙げる「除夜病中段屯田に贈る」詩では、典拠は示されていないが、自分自身の姿を喩える「灰」がある。

「除夜病中贈段屯田」〔合注〕卷十二、熙寧七年

（一〇七四）、三十九歳、於密州）

龍鍾三十九 龍鍾たり三十九

勞生已強半 生を勞して已に強半

歲暮日斜時 歲暮日斜めなる時

還為昔人歎 還た昔人の歎を為す

今年一線在 今年一線在り

那復堪把玩 那ぞ復た把玩するに堪えん

欲起強持酒 起って強いて酒を持せんと欲するも

故交雲雨散 故交雲雨散ず

惟有病相尋 惟だ病の相い尋ぬる有り

空齋為老伴 空齋老伴と為る

蕭条灯火冷 蕭条として灯火冷やかなり

寒夜何時旦 寒夜何の時にか旦けん

倦僕触屏風 倦僕屏風に触れ

飢鼯嗅空案 飢鼯空案を嗅ぐ

数朝閑閣臥 数朝閑を閑ざして臥し

霜髮秋蓬乱 霜髮秋蓬乱る

伝聞使者来 伝え聞く使者来ると

策杖就梳盥 杖を策きて梳盥に就く

書来苦安慰 書来りて苦ろに安慰し

不怪造請緩 造請の緩なるを怪しまず

大夫忠烈後 大夫忠烈の後

高義金石貫 高義金石を貫く

要当擊權豪 要ず当に權豪に撃つべし

未肯覲衰懦 未だ肯えて衰懦を覲わず

此生何所似 此の生何の似たる所ぞ

暗尽灰中炭 暗に尽く灰中の炭

婦田計已決 婦田計已に決せり

此邦聊飯館 此の邦聊か館を飯る

三徑麤成資 三徑麤ぼ資を成さば

一枝有余暖 一枝余暖有り

願君更信宿 願わくば君更に信宿せよ

庶奉一笑粲 庶わくば一笑に粲たるを奉ぜん

詩題の段屯田とは段繹（十一世紀）という人物だが、査注に名が見えるのみで、詳しい行状は不明である。<sup>26</sup>

冒頭から第十六句までは、人生の半ばを過ぎ、除夜を孤独に過ごす詩人の姿が描かれている。第四句に見える「昔人歎」は、蘇軾が自注で「樂天詩に云え

らく、行年三十九、歳暮日斜めなる時（楽天詩云、行年三十九、歳暮日斜時）と付している通り、白居易（七七二〜八四六）の「隠几」<sup>27</sup>詩が意識されている。第四句までは白居易詩を踏まえているが、両者の内容には大きな差がある。白居易詩では、このあと「四十にして心不動、吾今其れ庶幾し（四十心不動、吾今其庶幾）」と続き、四十にして、心がほとんど動揺しないと詠う。しかし蘇詩では、暮れゆく年も残すところあとわずかで、楽しむこともできず、「故交」も「雲雨」のように散った、と孤独さを強調する。同じく人生が半ばに達したにも関わらず、兩人の心境の違いが読み取れ、詩人の人生半ばにして年老いた（龍鍾）さまがうかがえる。

第十七句から第二十四句までは、段繹への言葉が詠われる。孤独であった蘇軾のもとに「使者」が訪れ、「書」の中で病んだ蘇軾を慰め、挨拶の遅れを咎めることもしない。第二十一句にみえる「忠烈」とは、段秀実（七一九〜七八三）のことであり、『旧唐書』巻一二八に伝記が見える<sup>28</sup>。段繹を段秀実になぞらえて、彼の「高義」が「権豪」を「撃」つであらうこと、一方で自分のような「衰儒」は目をこぼしてくれることを称える。詩人は段繹に比して、自身の「生」を「灰中の炭」と喩える。燃え尽きた灰ではあるが、

その中にまだ燃え尽きていない「炭」がある。ここでの灰は、第十六句までに詠われた詩人の現状を暗示しているのではないだろうか。では「炭」とはなににか。

第二十六・二十七句で「帰田」の「計」は「決」しており、今は「館」を「仮」りているに過ぎないと、未来へと視点が向いている。未来の住まいは、狭い「一枝」のようなものであるかもしれないが、「君」が「信宿」してくれたなら、「一笑」を「奉」じたいと、将来への望みを詠って詩を結んでいる。

該詩では、現状から未来へと視点が向いている。現状が「灰」であるならば、「炭」は、将来への望みを暗示していると考えられる。

### 三・一 黄州左遷期（二〇八〇〜二〇八四）

黄州左遷期の「灰」の用例は、四例<sup>29</sup>あり、本節ではそのうち一例を挙げる。以下に挙げる「秦太虚の梅花に和す」詩は、「寒食雨二首」より後に書かれ、「王维呉道子の画」詩と同じく、典拠として『莊子』が示される。

「和秦太虚梅花」（『合注』巻二十二、元豊七年（二〇八四）作、四十九歳、於黄州）

西湖処士骨応槁 西湖処士骨応に槁るべし  
只有此詩君庄倒 只此の詩有りて君庄倒す

東坡先生心已灰 東坡先生心已に灰  
為愛君詩被花惱 君が詩を愛する為に花に悩ま  
る

多情立馬待黃昏 多情馬を立てて黃昏に待ち  
殘雪消遲月出早 殘雪消ゆること遅く月出づる  
こと早し

江頭千樹春欲闇 江頭千樹春闇れんと欲し  
竹外一枝斜更好 竹外一枝斜めなるは更に好し  
孤山山下醉眠処 孤山山下酔いて眠る処  
点綴裙腰紛不掃 裙腰を点綴し紛として掃わず  
万里春随逐客来 万里春は逐客に随いて来り  
十年花送佳人老 十年花は送って佳人老ゆ  
去年花開我已病 去年花開きて我已に病み  
今年对花還草草 今年花に對し還た草草  
不知風雨捲春歸 知らず風雨の春を捲いて歸るを  
收拾余香還昇昊 余香を收拾して還た昊に昇えん

秦觀（一〇四九—一一〇〇）の詠梅詩に和した詩である。第一句に見える「西湖処土」とは、「疏影暗香」の詠梅詩で名高い林逋（九六七—一〇二八）であり、<sup>30</sup>第二句では秦觀の詩が林逋の詩を压倒したと詠う。詩人の心はずでに「灰」であったのに、秦觀の作った詩のおかげで花に心を奪われるようになってしまった。秦觀の詠梅詩によって、「灰」のこころで

あった詩人が、梅の花への関心を高めていく。続く第五句から第八句で、梅の花の前に馬を止めて黃昏を待てば、雪は解けることなく月の出は早い、川辺の木々に夕闇が訪れるころ、竹むらの外側に斜めに伸びた梅の姿は殊更によい、と梅の花を描写する。

眼前の梅の描写から、詩人の思いは過去へと移っていく。第九句の「孤山」は杭州にあり、蘇軾は熙寧四年（一〇七二）から七年（一〇七四）まで杭州通判であった。<sup>31</sup>白居易の「杭州春望」詩<sup>32</sup>で「誰か開く湖寺西南の路、草緑にして裙腰一道斜なり（誰開湖寺西南路、草緑裙腰一道斜）」とあり、白居易は自注で「孤山寺の路湖中に在り、草緑なる時、望めば裙腰の如し（孤山寺路在湖中、草緑時望如裙腰）」と、孤山寺の道は遠くから望めば、「裙腰」のように見えたと言明する。梅の花の散る時期には、「裙腰」のような道を梅の花が「点綴」したのであろう。杭州を思い出すのもつかの間、詩人は自身の境遇を顧みる。今は杭州から「万里」も離れた「逐客」であり、「十年」花を見「送」っているうちに「老」いてゆく。

そうして黄州での生活に思いが至る。「去年」に「花」が「開」いたころは「病」んでおり、「今年」も「花」に「対」しても「草草」たる思い。「草草」は『詩経』小雅「巷伯」<sup>33</sup>に「勞人草草たり（勞人草

草」とあり、毛伝に「草草は、心を勞するなり（草草、勞心也）」と、心勞するさまを表すときに使われる。秦觀の詩によって梅の花に関心を持つも、なお詩人の心勞が読み取れる。「知」らずして「風雨」が「春」を天に「帰」してしまふから、「余香」を「收拾」して「晁」に渡そうと結ぶ。

第三句「心已灰」には、「心灰、前の王維吳道子の画を見よ（心灰、見前王維吳道子画）」との注があり、第四句で梅花に心を奪われたという華やいだ気分と対比されている。該詩での「心已灰」は、『莊子』にいう「自分を喪った」状態をいうことに力点が置かれているのではなく、むしろ秦觀詩の秀逸さをやや大げさな言葉を用いることで、秦觀詩を讃たえ、感謝の意を伝えることに置かれているのであろう。

ただ、秦觀の詩によって「灰」の心は、「花」に「悩」まされるようになるものの、まだ「草々」たる思いが、蘇軾の胸を去来していたのである。

### 三・三 黄州左遷以後（一〇八五―一〇二一）

黄州左遷後では、「灰」の用例は十七例<sup>34</sup>に見え、本節ではそのうち回例を取り上げる。本節で挙げる三例の「灰」が見える句には、「前の寒食詩の注を見よ（見前寒食詩注）」と付注されている<sup>35</sup>。先に見たと

おり、『合注』では「寒食雨二首・其二」の「死灰吹不起」句の注に、三つの典拠が示されている。では、「見前寒食詩注」と付注された句は、「寒食雨二首・其二」の「死灰吹不起」句と比べ、いかなる類似点や相違点があるのだろうか。まず、「次韻黄安中に答え兼ねて林子中に簡す」詩から挙げる。

「次韻答黄安中兼簡林子中」（『合注』卷三十三、元祐六年（一〇九一）作、五十六歳、於蘇州）

老去心灰不復然 老い去って心灰復た然えず

一麾江海意方堅 一麾江海意方に堅し

那堪黄散付子度 那ぞ堪えん黄散子度に付するを

空羨蘇杭養樂天 空しく羨む蘇杭の樂天を養うを

病肺一春難白酒 病肺一春白酒難く

別腸三夜繞朱絃 別腸三夜朱絃を繞り

郡仙正欲吾歸去 郡仙正に吾歸去せんと欲す

共挹清風借玉川 共に清風を挹って玉川に借せ

詩題にある黄安中は黄履（？―一〇二一）、林子中は林希（十一世紀）という人物である<sup>36</sup>。馮応榴によれば、この時蘇軾は、地方官になることをたびたび乞いながらも、すでに吏部尚書を拝命していた。黄履は蘇州の長官であり、林希は蘇軾に代わって杭州の長官になり、前半の四句はそのことをいっているのだという<sup>37</sup>。そうであるとすれば、第一句の「心」が「灰」

で、「意」が「堅」いのは、蘇軾自身を言っているの  
であろう。第二句に見える「一麾」は、もとは顔延  
年（三八四～四五六）の「五君詠・阮始平」詩に見  
え<sup>38</sup>、後に都の官僚でありながら地方官を求める意味  
で使われ、杜牧（八〇三～八五三）の詩<sup>39</sup>などにもあ  
る。地方官に就くことを望む詩人は、三句目で自らを  
子度に例えている。子度とは蔡廓（三七九～四二五）  
の字である。吏部尚書として召され、徐羨之（三四六  
～四二六）に「黃門以下の官職を選ぶのは、蔡廓にす  
べてまかせる。それ以上の官職を選ぶときは、共に処  
理しよう」と言われると「私は徐羨之の名の後ろには  
署名できない」と吏部尚書を断ったことが、『宋書』  
卷五十七「蔡廓伝」に記載されている<sup>40</sup>。自分も子度  
と同じように、その任に堪えられないことをいう。白  
居易が「蘇杭」を好んだことは「吳郡詩石記」<sup>41</sup>に見  
え、「樂天」を「養」うほど、風光明媚な「蘇杭」に  
任官する黄履と林希を羨むことであり、該句でも地方  
官を望む詩人の心情がうかがえる。

第五句で「肺」が「病」むほど痛飲した詩人は、そ  
の別れの情が「三夜」にわたって、「朱絃」の音が梁  
に「繞」っていると表現した。第七句の「郡仙」は黄  
と林を指す。詩人は望む場所への帰還に協力してほし  
いと願いを、盧仝（？～八三五）「走筆謝孟諫議新

茶」<sup>42</sup>詩を踏まえ、詩人自らを玉川子になぞらえ、蓬  
萊山に帰るために「清風」を「借」してくれと詠う。

以上のように、該詩から読み取れるのは、友との別  
れ難さと地方官を切に望む心情である。ここでもう一  
度、一句目を見てみると、「灰」と「然」字があること  
から、『漢書』「韓安国伝」に見える再起の暗示を想起  
させる。だが、二句目で「一麾」の「意」が「堅」い  
と、自身の地方官に就く望みを明言している。「心」が  
「灰」で「然」えないとは、中央に行き顯官となり、  
政治に積極的に関わる「心」は「灰」となり、もはや  
「燃」えぬと言っているのである。

次に、「紫团参王定国に寄す」詩を挙げる。

「紫团参寄王定国」〔合注〕卷三十七、元祐八年

（一〇九三）作、五十八歳、於定州）

谿谿土門口 谿谿たり土門の口

突兀太行頂 突兀たり太行の頂

豈惟团紫雲 豈に惟だ紫雲を团にするのみになら

んや

実自俯倒景 実自ら倒景を俯す

剛風被草木 剛風草木に被り

真氣入苔蘚 真氣苔蘚に入る

旧聞人銜芝 旧聞に人銜の芝

生此羊腸嶺 此の羊腸の嶺に生ずと



織撮虎豹鬣 織撮たり虎豹の鬣

蹙縮龍蛇癭 蹙縮す龍蛇の癭

蚕頭試小嚼 蚕頭試みに小嚼せば

龜息變方騁 龜息變方に騁ず

矧予明真子 矧んや予明真子

已造浮玉境 已に浮玉の境に造る

清宵月掛戸 清宵月戸に掛り

半夜珠落井 半夜珠井に落つ

灰心寧復然 灰心寧ぞ復た然えんや

汗喘久已靜 汗喘久しく已に靜なり

東坡猶故目 東坡猶お故目

北藥致遺秉 北藥遺秉を致す

欲持三樞根 三樞の根を持して

往侑九軛鼎 往きて九軛の鼎を侑めんと欲す

為予置齒頰 予の為に齒頰に置け

豈不賢酒茗 豈に酒茗に賢らざらんや

詩題の王定国は、王鞏（一〇四八―一二二二？）であり、詩文に優れ、蘇軾は「王定国集序」（『文集』卷十）を書いている。冒頭から第十二句までは、「紫团参」の生えている場所の様子、「紫团参」の形、「紫团参」の効能を述べている。第十三句の「明真子」は王定国を指し、<sup>43</sup>王定国が「已」に「浮玉境」に「造」<sup>いた</sup>っていることをいう。第十六句の「珠が「井」に「落」ちる

とは、『合注』によれば、嚙下している様子であり、<sup>44</sup>さらに『四河入海』によれば、この聯は王定国の養生法の様子を表している。<sup>45</sup>

以上の解釈によれば、第十七句の「灰心」とは王定国の「心」である。「灰心寧復然」句には、「灰心、前の王維呉道子の画及び王鞏の独り眠るに次韻すの詩注を見よ。灰復然、前の寒食雨詩注を見よ（灰心、見前王維呉道子畫及次韻王鞏独眠<sup>46</sup>詩注。灰復然、見前寒食雨詩注）」と注がある。「然」の字があることから、『漢書』『韓安国伝』を想起することも可能であろう。しかし、該詩の前年に書かれた詩の題で<sup>47</sup>蘇軾は王定国について「而るに定国道を学びて得ること有り、百念灰冷にして、顔益す壮かん（而定国学道有得、百念灰冷、而顔益壮）」と述べる。「灰心」が、王定国の心のありさまを表しているのであれば、「王維呉道子の画」詩と同じく感情に動かされることのない心境を表すのに「灰」を用いているのではないだろうか。

最後に、「海南人寒食を作さず、而して以て上巳冢に上る。予一瓢の酒を携え、諸生を尋ぬるも、皆な出づ。独り老符秀才在るのみ、因りて与に飲み、酔に至る。符蓋し儋人の貧に安んじ静を守る者なり」詩を挙げる。該詩は、寒食の季節に左遷の地で詠まれたとい



う点で、「寒食雨二首」と共通点がある。

「海南人不作寒食、而以上巳上冢。予携一瓢酒、尋諸生、皆出矣。独老符秀才在、因与飲、至醉。符蓋儋人之安貧守静者也」(『合注』卷四十二、紹聖五年(一〇九八)三月三日作、六十三歳、於昌化軍)

老鴉銜肉紙飛灰 老鴉肉を銜んで紙灰を飛ばす

万里家山安在哉 万里の家山安に在らんや

蒼耳林中太白過 蒼耳林中太白過ぎり

鹿門山下徳公回 鹿門山下徳公回る

管寧投老終歸去 管寧老を投じて終に歸り去り

王式当年本不来 王式当年本と来たらず

記取城南上巳日 記取す城南上巳の日

木棉花落刺桐開 木棉花落ちて刺桐開くを

詩題の符秀才については、「林」という名であったことを除き、詳しい行状は不明である<sup>48</sup>。

墓参りの季節、鳥が肉を銜え、燃えた紙銭の灰が飛び、遙か彼方の故郷はどこにあるのかと思う。第一句では「上巳」の風景が描写され、該句に「前の寒食詩注を見よ」と注がある。但しこれは、「死灰吹不起」句の注を指すのではなく、「但感鳥銜紙」句の注と考えられる<sup>49</sup>。第一句を承けて第二句では、「寒食雨二首・其二」の「墳墓万里に在り」と同じく、故郷に思いを馳

せる。

蒼耳の林に李白が訪ね、鹿門山に徳公が帰ったようなもの。第三句「蒼耳林中太白過ぎり」とは、李白(七〇一〜七六二)の「魯城の北の范居士を尋ね、道を失いて蒼耳の中に落ち、范の酒を置き蒼耳を摘むを見て作る」詩にもとづいている。李白詩では、范居士に会いたくなった李白が、道に迷いながら范居士の住まいを訪ね、共に酒を楽しんだ事が詠われる<sup>50</sup>。ここでは、詩人が符林を尋ねて行ったことを喩えている。第四句「鹿門山下徳公回る」は、『後漢書』「龐公伝」に徳公が鹿門山に帰った話が見え<sup>51</sup>、ここでは符林が帰って来たことを喩えている。

管寧は年老いて故郷に帰り、王式はもとと来る気がなかった。第五句「管寧」は、『三国志』に、文帝が即位すると管寧を招き、管寧は家族を引き連れ、海路で故郷の北海郡に戻ったことが見える<sup>52</sup>。該詩では、郷里から離れていた符秀才が、年老いて故郷に戻ってきたことを喩えていると考えられる。第六句の「王式」は、『漢書』「儒林伝」に見える。博士として招かれると、他の博士が酒宴をして王式をねぎらった。王式に嫉妬していた者が、王式を辱めると、客人が去った後に「もともと来たくなかったのだ。皆が是非にといったのに、結局、小僧に辱められるだけだった」と

いい、病を称して家に帰り、一生を終えた<sup>53</sup>。該詩では、符秀才もとは故郷から離れるつもりはなかったことを喻えているのではないだろうか。

第七・八句では、憶えておこう城南の地で木綿の花が散って、刺桐の花が咲いたことを、と詩を結ぶ。

第一句で「灰」は、寒食を思わせるものとして、詩の中に現れ、同時に故郷を連想させる。該詩の「灰」は、詩人に寒食を想起させ、そこから故郷を連想させるものとして、詩中に現れるのではないだろうか。

#### 四 おわりに

ここまでの内容を踏まえて、「寒食雨二首・其二」とその末句の内容を見直してみよう。寒食の時期、詩人は左遷の地で秋のような気候の中雨にふり込められ、家の中は寒食らしからぬさまで、都や故郷に思いを寄せても遠く離れたところにある。道に窮した古人のように哭することもできず、為す術もなく「死灰」は「吹」いても「起」つことはない、と詠う。また詩中に、季節に合わない光景を詠うことで、「灰」に自身が季節の巡らない場所にいる不安感も込めた。この「死灰」は、黄州左遷前に詠われた感情に動かされることのない心境（「王維呉道子画」）ではなく、「灰中之

炭」（「除夜病中贈段屯田」）のような将来への望みを含むものでもない。

「寒食雨二首」より後に書かれた、秦觀の梅花詩に和した詩では秦觀への感謝と彼の詩が秀逸であることを讃えるために対比させて用いられた（「和秦太虚梅花」）。「灰」が用いられているとはいえ、その重点は秦觀の詩に置かれており、詩人のいう「灰」とは、秦觀の詩を読めば美なるものに感情をゆさぶられる感受性を取り戻すことができることを強調するための言葉と言えよう。

黄州左遷以後は、中央で顯官になる心がないことを示す「灰」（「次韻答黄安中兼簡林子中」）、友人の感情に動かされることのない心境を示す「灰」（「紫团参寄王定国」）が見られた。また、黄州左遷期と同じく、寒食の時期、左遷先で詠まれた海南島での作では、故郷を連想させる実景として「灰」が用いられていた（「海南人不作寒食、而以上已上冢。予携一瓢酒、尋諸生、皆出矣。独老符秀才在、因与飲、至醉。符蓋儋人之安貧守静者也」）。

蘇軾の生涯を通じて、「死灰吹不起」句の「灰」は、他の「灰」の用法にはない為す術もないという思いと自身が季節の巡らない場所にいる不安感を込めた「灰」であるといえよう。そこから、黄州左遷期の蘇

軾の深い心の傷を詠っている句と位置づけることがで  
きるのではないだろうか。

- 1 山本和義『詩人と造物 蘇軾論考』（研文出版  
二〇〇二年）二七四頁。初出は、『書論』第二十  
号（書論研究会 一九八二年）。
- 2 注1前掲書二七四頁。
- 3 岩城秀夫「梅花と返魂―蘇軾における再起の悲  
願―」（『日本中国学会報』第三十集 一九七八  
年）。山口若菜「蘇軾の「自新」の記録―黃  
州における三年間の「正月二十日」の詩につい  
て」（『筑波中国文化論叢』二五 二〇〇五年）。
- 4 底本は、孔凡礼『蘇軾文集』（中華書局  
一九八六年）。以下『文集』と略す。
- 5 「灰になった紙は吹きたてたとして燃えあがらな  
いものだ。（中略）史記の韓長儒伝に、韓安国  
が罪を得たとき獄吏が辱めたので、安国が「死  
灰 独り復た然えざらんや」というと、獄吏は  
「然えたら小便をかけてやろう」といったと。  
宋玉の風賦（文選卷十三）「庶人の風」をのべた  
句に、「死灰 吹く」の句がある。」（近藤光男  
『蘇東坡』（集英社 一九六六年）九五頁）。
- 6 「燃え尽きた灰にも似て、もはやその力さえも  
残っていない。（中略）死灰一句、死灰は燃え  
つきた灰。『漢書』に韓安国が法に触れて下獄  
したとき、獄吏が辱めたので「死灰 独り復た  
然えざらんや」と言ったところ、獄吏は「然え  
たら小便をかけてやろう」と言ったという。一  
句は紙銭から導かれたのであるう。」（山本和義  
『蘇東坡詩選』（岩波文庫 一九七五年）二〇八  
頁）。
- 7 「這句又上承「烏銜紙」、切合寒食節特殊風光。  
兩句謂自己擬学阮籍途窮之哭、不作死灰復燃之  
望、以免再受迫害。」（王水照『蘇軾選集』（上海  
古籍出版社 一九八四年）百四十六頁）。
- 8 「死灰、在字面上是指上面「烏銜紙」的紙錢  
灰、實隱用漢韓安国的話、（中略）作者說「死灰  
吹不起」、也就是死灰不復然、以免被人「溺」  
（陳邇冬『蘇軾詩選』（人民文学出版社  
一九八四年）百八十九頁）。
- 9 『渭南文集』卷一五「施司諫註東坡詩序」（浙江  
古籍出版社 二〇一六年）。
- 10 蘇軾詩は、馮応榴『蘇軾詩集合注』（上海古籍  
出版社 二〇〇一年）を底本とし（以下『合  
注』と略す）、孔凡礼『蘇軾詩集』（中華書局

一九八六年。以下『詩集』と略す)、及び張志烈、馬德富、周裕鏞『蘇軾全集校注』(河北人民出版社 二〇一〇年。以下『全集』と略す)を参照した。また、詩の製作年代と製作場所は『全集』に拠り、蘇軾の年齢の表記は数え年とする。

- 11 『杜詩詳注』卷之五(中華書局 二〇一五年)。
- 12 『梅堯臣集編年校注』卷十(上海古籍出版社 二〇〇六年)。
- 13 『合注』では「感」に作るが、真跡によって「見」に改める。
- 14 去冬節一百五日、即有疾風甚雨、謂之寒食、禁火三日、造餠大麥粥。(『荆楚歲時記』)。
- 15 『韋応物集校注 増訂本』卷三(上海古籍出版社 二〇一一年)。
- 17 中田祝夫編『四河入海』卷二十二(勉誠社 一九七〇年)。
- 18 中田祝夫編『四河入海』卷二十二(勉誠社 一九七〇年)。
- 19 『全唐詩』卷九十七(中華書局 一九六〇年)。
- 20 『詩神龍二年(七〇六)三月驪州作』(『沈佺期宋之問集校注』卷二(中華書局 二〇〇一年) 九九頁)。

21 又叶時日於晷度、效地氣於灰管。故陰陽和則景至、律氣応則灰飛。底本は『晋書』(中華書局 一九七四年)。

22 「贈孫莘老七絶 其一」、「孤山二詠并引 柏堂」、「杜介熙熙堂」、「送參寥師」、「書双竹湛師房二首」、「驪山三絶句 其二」、「登常山絶頂広麗亭」、「趙郎中見和戲復答之」、「聞釋才法師復歸上天竺以詩戲問」、「除夜病中贈段屯田」、「又送鄭戸曹」、「送柳子玉赴靈仙」、「謝郡人田賀二生献花」、「寄呂穆仲寺丞」、「李公扈過高郵、見施大夫与孫莘老賞花詩、憶与僕去歲会於彭門折花餽筍故事、作詩二十四韻見戲。依韻奉答、亦以戲公扈云」。

23 鳳翔八觀詩、記可觀者八也。(中略) 鳳翔当秦蜀之交、士大夫之所朝夕往来、此八觀者、又皆跬步可至、而好事者有不能遍觀焉。故作詩以告欲觀而不知者。

24 南郭子綦隱机而坐、仰天而嘘、答焉似喪其耦。顔成子游立侍乎前、曰、何居乎。形固可使如槁木、而心固可使如死灰乎。今之隱机者、非昔之隱机者也。子綦曰、偃、不亦善乎、而問之也。今者吾喪我、汝知之乎。女聞人籟而未聞地籟、女聞地籟而未聞天籟夫。(『新編諸子集成 莊子

集解』（中華書局 二〇一二年）。

25 ここでは『莊子』に見える語彙を仏教画の形容に用いており、蘇軾の老莊と仏教に対する考え方が如何なるものであったかという問題が生じるが、それについては立ち入らない。

26 査註、段屯田名釋、字釈之。時為提刑、見欒城集。

27 身適忘四支、心適忘是非。既適又忘適、不知吾是誰。百体如槁木、兀然無所知。方寸如死灰、寂然無所思。今日復明日、身心忽兩遺。行年三十九、歲暮日斜時。四十心不動、吾今其庶幾。（朱金城『白居易集箋校』卷六（上海古籍出版社 一九八八年）。

28 『旧唐書』卷一二八「段秀実伝」（中華書局 一九七五年）。

29 「姪安節遠來夜坐三首・其一」、「岐亭道上見梅花戲贈季常」、「十一月十三日、与幾先自竹西來訪慶老、不見、独与君卿供奉、蟾知客東閣道話久之」。

30 王註續曰、西湖処士、指林逋也。

31 孔凡礼撰『蘇軾年譜』（中華書局 一九九八年）に拠る。

32 朱金城『白居易集箋校』卷二十（上海古籍出版社

社 一九八八年）。

33 底本は『十三經注疏本』。

34 「金門寺中見李西台与二錢唱和四絶句戲用其韻跋之 其四」、「贈月長老」、「寄鑑合刷餅与子由」、「荔枝嘆」、「十二月十七日夜坐達曉寄子由」、「夜燒松明火」、「儋耳」、「沈香石」、「六觀堂老人草書」、「在彭城日、与定国為九日黃樓之会。今復以是日相遇於宋。凡十五年、憂樂出処、有不可勝言者。而定国學道有得、百念灰冷、而顔益壯。顧子衰病、心形俱悴。感之作詩」、「虔州景德寺榮師湛然堂」、「立春日小集戲李端叔」、「贈嶺上老人」。

35 ほかに「和陶貧士七首并引・其二」もあるが、小稿では紙幅の都合上取り上げない。

36 黄履は『宋史』卷三二八に、林希は『宋史』卷三四三にそれぞれ伝記がある。（底本は、『宋史』（中華書局 一九七七年）。

37 又案、続通鑑長編、元祐六年六月、知蘇州黄履知江寧府。先生屢乞外郡、而是時已奉命為吏部尚書、安中尚守蘇州、子中代先生守杭州、故前四句云然。

38 「屢薦不入官、一麾乃世守。」（『文選』卷二十一「五君詠・阮始平」）。

39 「欲把一麾江海去、樂游原上望昭陵。」〔杜牧集

繁年校注〕卷二「將赴吳與登樂遊原一絕」中華書局 二〇〇八年。

40 「徵為吏部尚書。廓因北地傳隆問亮、選事若悉以

見付、不論、不然。不能拜也。亮以語錄尚書徐美之、美之曰、黃門郎以下、悉以委蔡、吾徒不復厝懷。自此以上、故宜共參同異。廓曰、我不能為徐干木署紙尾也。遂不拜。」〔宋書〕中華書局 一九七四年。

41 「貞元初、韋應物為蘇州牧、房孺復為杭州牧、皆

豪人也。韋嗜詩、房嗜酒。（中略）或目韋、房為詩酒仙。時予始年十四五、旅二郡、（中略）以當時心言異日蘇杭獲一郡、足矣。及今自中書舍人間領二州、去年脫杭印、今年佩蘇印、既醉於彼、又吟於此、（中略）則蘇杭之風景、韋房之詩酒、兼有之矣。」（朱金城『白居易集箋校』卷六十八 上海古籍出版社 一九八八年）。

42 「（前略）蓬萊山、在何處。玉川子乘此清風欲歸

去。山上郡仙司下土、地位清高隔風雨。」〔玉川子詩集〕卷二 四部叢刊本。

43 「明真子 芳云次公曰指言王定國也」（中田祝夫

編『四河入海』卷五十七 勉誠社 一九七〇年）。

44 王註厚曰、珠落井以言咽納也。

45 「清宵 脞云此以下二句言定國養生道引之法也」（中田祝夫編『四河入海』卷五十七 勉誠社 一九七〇年）。

46 「次韻王鞏独眠」（〔合注〕卷十七）の「居士身心

如槁木」句に「施註、莊十庚桑楚篇、身若槁木之枝、而心若死灰、若是者、禍亦不至、福亦不來。又見前王維吳道子画詩註。」と付注がある。

47 「在彭城日、与定國為九日黃樓之會。今復以是

日相遇於宋。凡十五年、憂樂出處、有不可勝言者。而定國學道有得、百念灰冷、而顏益壯。顧子衰病、心形俱悴、感之作詩」。

48 查註、瀛奎律髓云、昌黎不謫潮州、後世豈知有

趙德。東坡不落海南、後世豈知有符林。按林即老符之名也。

49 施註、白樂天寒食吟、風吹曠野紙錢飛。榴案、

封氏聞見記、紙錢、魏晉以來始有其事。

50 「雁度秋色遠、日靜無雲時。客心不自得、浩漫

將何之。忽憶范野人、閑園養幽姿。茫然起逸興、但恐行來遲。城壕失往路、馬首迷荒陂。不惜翠雲裘、遂為蒼耳欺。入門且一笑、把臂君為誰。酒客愛秋蔬、山盤薦霜梨。他筵不下筯、此席忘朝飢。酸棗垂北郭、寒瓜蔓東籬。還傾四五

酌、自詠猛虎詞。近作十日飲、遠為千載期。  
風流自簸蕩、謔浪偏相宜。酣來上馬去、却笑高  
陽池。」(《李太白全集》卷之二十 中華書局  
一九七七年)。

51 「龐公者、南郡襄陽人也。(中略)後遂携其妻子  
登鹿門山、因采藥不反。《後漢書》卷八十三  
「逸民列傳」中華書局 一九六五年)。

52 「文帝即位、徵寧、遂將家屬浮海還郡」(《三  
國志》「魏書」卷十一「管寧傳」中華書局  
一九八二年)。

53 「式徵來、衣博士衣而不冠、曰、刑余之人、何宜  
復充礼官。既至、止舍中、会諸大夫博士、共持  
酒肉勞式、(中略)博士江公世為魯詩、至江公著  
孝經說、心嫉式(中略)式恥之、陽醉邊墜。式  
客罷、讓諸生曰、我本不欲來、諸生彊勸我、竟  
為豎子所辱。遂謝病免歸、終於家。」(《漢書》卷  
八十八「儒林傳」中華書局 一九六二年)。



## 关于蘇軾“寒食雨二首”诗 ——以“死灰吹不起”句为中心——

室 贵 明

苏轼在左迁至黄州时期创作出前后《赤壁赋》及《念奴娇赤壁怀古》。这个时期虽然是苏轼的文学的收获期，但由于对自身的境遇悲观失望，表现这种悲观情绪的诗也不少。举《寒食雨二首》为例，诗的大意为自己在黄州已经过了三年，今年的寒食在长雨感到痛苦（《寒食雨二首其一》），并描写自己贫寒相的生活，仕途不遇，无法返回故乡的境遇，并在末尾一句写到“死灰吹不起”。对于最后一句，历代的注释者们引用了《汉书 韩安国传》、《晋书 律历志上》、宋玉《风赋》来解释。至今为止，该句多是根据《汉书》来解释的。笔者一方面同意根据“汉书”进行解释，但同时也注意基于《晋书》解释该句。此外在本文中也有着重分析了苏诗中“灰”的用法。笔者试图从以上两个方面，寻找在“寒食雨二首”末尾一句在苏轼生涯中的定位。

在《寒食雨二首其一》中，第三联两句强调秋天的气候，出现了让人联想秋天的“苦雨”和“秋萧瑟”。第四联，苏轼寻找着春天的象征“海棠花”，试图感受到春天的气息。在《寒食雨二首其二》中、第三联中寒食节本禁火却咏火，这是不合乎寒食的习惯的。但同时苏轼又期望从乌衔纸中找到寒食节的味道。可以说这是苏轼通过咏诵不和时节的事物，来咏诵自己的不合时宜的寒食节。从以上来看，根据《晋书 律历志上》解释的“死灰”可以看出，诗人从眼前的灰联想到自己无法实现东山再起的现状，也同时表现出自己在不合时宜的环境中的不安之感。

接下来分析“灰”的用法。在苏轼黄州左迁之前的诗中，“灰”表示超俗的心境（《王维吴道子画》），表示如「灰中之炭」一般，对将来抱有的希望（《除夜病中赠段屯田》）。在「寒食雨二首」之后所写的《和秦太虚梅花》中，「灰」被用作对向秦的感谢以及称赞其诗的优秀。黄州左迁之后，“灰”的内涵变为了自己仕途不遇的心“灰”（《次韵答黄安中兼简林子中》），朋友超世俗的心境的“灰”（《紫团参寄王定国》）。与黄州左迁期一样，在海南岛的作品中，在书写故乡景色之时同样使用了“灰”一字。

通过苏轼的一生，《寒食雨二首》中的“死灰”，可以说充满了对政治的冷淡，以及对自己不合时宜的无处安放的不安感的表现。从者里能我们可以读取左迁时期苏轼内心的苦闷。